

市野迷菴手抄 『東臯琴譜』

坂田 進一

『東臯琴譜』（杉浦琴川編纂一七一〇自序）は、邦人撰琴譜集の嚆矢となるのみならず、中国曹洞宗寿昌派第三十五世の正宗・東臯心越禪師（一六三九〜一六九五）の東渡に際し、禪師自身がかの地で学び将来した明末浙派琴曲の小操を多く所収し、かつ新旧の詩詞を採取したことにより、その後の日本琴学再興二百五十年の日月の流れの中で、学ばれ歌われるに際して実際に現場で用いられたテキスト中の最も重要な琴譜であるが、その結果として、経書の断片ばかりか唐詩や宋詞体が唐音（ちやういん）をもつて直接江戸人士の口の端に上ったのである。

また、こうした琴学再興後の盛衰と該譜の普及度は不可分の関係にあり、後の享保年間（一七二六〜一七三六）の古文辞、すなわち荻生徂徠（一六六六〜一七二八）の護園学派を中心とした唐音学習熱と相まつたこともあり、本邦唐音学習史上における貴重な資料（中山久四郎『唐音十八考』、有坂秀世『国語音韻史の研究』、神田喜一郎『日本填詞史話』など参照）ともなる。

『東臯琴譜』は塵下の大身杉浦琴川（二六七一〜一七二一）編纂になるものを正本（五十七曲本）とするが、故あってこれは公刊されず、巷間に広まることなく秘されたのである。しかもこの正副浄書の稿本も三百年後の平成年間にようやく浄書稿本の一部分が発見されるまでは、長い間佚書とされ行方知れずであった。

禅師直伝の杉浦琴川に学んだ小野田東川（一六八四〜一七六三）が初期に用いた琴川撰四十八曲本、同じく東川の後期に撰した初学十六曲本、後れて児玉空空撰三十三曲本などがそれぞれの師承により、授受の際に転写され抄写本として伝承されていたが、版本としては明和九（一七七二）年に至り、はじめて十六曲本の一種・鈴木蘭園版刊本が公刊され、以来、幕末に至るまでに菊池遷甫版刊本、大江玄甫版刊本、児島鳳林版刊本のおおよそ四種の公刊本をみる事ができる。

市野迷庵（一七六五〜一八二六）、名は光彦、字は俊卿、別に子邦。篋窓うんの他に迷庵、醉堂、不忍池漁などと号した。迷庵とは晩年の号で、江戸市井の考証学者にして渋江抽斎の恩師でもある。

伊勢白子の住人六世の祖市野重光が、江戸の神田に出て質舗を開き、四世の孫某は性賢にして学を好み、その男光紀に香川氏を配し迷庵を得た。

迷庵は年少にしてその祖父の遺愛書を読んで奮起、学業を黒沢迂仲、他に経書・六芸、中にも琴学を研鑽し、さらには聖堂で林述斎の講義を受け、平沢旭山、市川寛斎等と交ったが、年三十にして思う所あって交遊を尽く謝絶し、「廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し」とばかり、神田の塵市に在って専らその本業に従事したが、余暇は考証と琴書に耽溺したのである。

十余年の後、再び市中に出でて旧交を尋ねるもはやその多くは老病の境にあり、ためにさらに深居して読書弾

琴し世と接せずに没したという。また当時の考証学者・狩谷掖斎もまた市井にあつて古を好んだことから、兩人の相交ること甚だ兄弟の如くに密であつたと。文政九年八月十四日歿す。年六十二。

なお、慶大・斯道文庫には迷庵自筆稿本『篋窓摘藁』があり、就中、偶々江戸の琴事に触れるが、さらにこの迷庵手抄『東臯琴譜』は琴川本四十八曲の目録と、この中から東川撰初学十六曲を抜いた三十二の小操の減字譜が所収され、迷庵学琴の痕跡が記される江戸市井琴学史上の貴重な資料となる。

東臯心越禪師は東渡後の紆余曲折を経て、最終的には水戸公・徳川光圀卿の援助の下、水戸は曹洞宗岱宗山天徳寺（禪師の遷化後、天徳寺を移し跡地をもつて寿昌山祇園寺となし禪師をして開山第一世とした）に入山開堂し明末曹洞禪を大いに鼓吹し、日本の禪界に新風を吹き込むが、一方では一箇の傑出した禅僧である以上に、明末清初当時の士大夫階級一般の学問芸術を一通り修めていたため、却つて明末文人の実際の雛形として期待尊重され、江戸は天和から元禄期を迎えるにあつて、太平百年ようやく開花しようとする日本の文芸界の人士間に、「僧中に真儒あり」と喧伝持て囃され、琴学や篆刻をはじめとし、書画、ことに隸書（八分）^{はつぶん}、さらには宋詞体をも伝えたことで知られる。

禪師は浙江省金華府婺郡浦江県の俗姓蔣氏（母は陳氏）の家に生まれ、諱を興儔、字は心越、初名を兆隱、別に東臯と号したが、多くは東臯心越と自署したため、巷間これに倣つて東臯心越禪師、また徒略して東臯禪師、心越禪師と呼ばれ、渡来直後しばらく長崎興福寺に錫を留めたころにはその山名をとつて東明心越と名乗つた。